

船山 千恵さん インタビュー

2020年5月24日

HANDSとの出会い

2002年4月、小山市外国人児童生徒指導員として採用され、小山市立小山第三中学校の日本語教室で、日本語の習得が十分でない生徒に対して、日本語指導・教科学習等の支援にあたりました。その時の日本語教室担当教諭で上司にあたる方が若林秀樹先生でした。臨時採用の教職員として、6校の小中学校に計9年間勤務しました。栃木市立栃木西中学校で日本語教室を担当したこともありますが、産休・育休補助として英語科の職員、小学校低学年指導助手、T・Tや発達に課題のある生徒を取り出して学習支援を行う中学校学習指導助手など、立場はその時々異なりますが、様々な子供たちに関わりました。

9年が経つ頃、若林先生から連絡をいただき、宇都宮大学HANDSプロジェクトを知り、田巻先生に出会いました。外国人児童生徒教育に関心があり、『中学教科単語帳』のスペイン語版を計画中とのこととでスペイン語が多少でもわかるコーディネーターを探しているとのことでした。そして、2011年4月にコーディネーターとして着任しました。その後7年間、HANDSの様々な活動に携わらせていただきました。

7年間の活動

HANDSプロジェクトの活動報告誌『HANDSnext』を改めて見返したところ、実にたくさんの活動を行ってこれたと感じました。相談のある度に、どんな支援が可能かと対応策を田巻先生や学内の先生方と協議します。大きな課題には、外国人児童生徒の関わる諸問題について、田巻先生が大学として何ができるかと中長期的な計画を立ててくれて、どう実践していけるかを教育学部と国際学部のHANDSプロジェクトの先生方が検討してくれ、地域の関係者の皆様や学生の協力も大きかったので、私は7年間続けてこれたのだと思います。

外国につながる子どもフォーラム、多言語による高校進学ガイダンス、外国人児童生徒のための学生ボランティア派遣事業、中学教科単語帳の刊行、外国人生徒進路調査などの大きな事業に加え、宇都宮市内の子どもたちを対象とした子ども国際理解サマースクール、適宜現場からのニーズに応えた国際理解教育の小中学校での実践、真岡市の母語保持教室での夏季休業中の課題解決型の学生ボランティア派遣など、事業は多岐にわたり、複数の事業を毎日少しずつコーディネートし、準備をしつつ、『中学教科単語帳』の編集作業も同時進行しなければならないのが、私の技量の問題もあり、特に行事が集中する秋は正直大変でした。

また、今では「外国人児童生徒教育といえば宇都宮大学HANDSプロジェクト」ですが、私が2011年にHANDSに合流したころは、小中学校や行政等に外国人児童生徒教育に関して活発な教職員の方々が一定数いる一方で、HANDSと聞いてその活動内容にピンとくる関係者の方々は多くはなかったので、周知や広報についても含め、一步一步前進させるために理解を得るまでは労力を要しました。しかし、地域の方々がHANDSの活動について知るにつれ、「外国人児童生徒教育といえば宇都宮大学HANDSプロジェクト」となり、そうなるからは、大学と地域が連携して諸事業をより一層強力に推進していくことができました。

HANDSの諸事業を強力に推進できたのは、学校関係者、国際交流協会、地域の皆様や宇都宮大学の学生のご協力があったからだと思います。改めて、御礼申し上げます。

HAND Jrという学生団体をはじめ、携わってくれた学生たちが、外国人児童生徒教育を取り巻く問題に対して、行事ごとに意識が高まり、例えば、外国につながる子どもフォーラム2011では元外国人児童生徒であった国際学部の学生を中心に、かれらの実体験からの問題や熱い思いを劇という形で発信しました。かれらの成長を間近で見られたことは、幸せでした。

エピソード

7年の間には、栃木県のみならず、日本中から多くの子どもたちやその保護者、支援を要する方々、その支援者の方々と出会いました。HANDSの事務局には、感謝の手紙やメールを数多くいただき、どれもその温かさに励まされましたが、忘れられない思い出の中から1つ挙げてみようと思います。

2012年度の学生ボランティア派遣事業で、当時国際学部3年生で香港にルーツのあるSさんは、県東の中学校に在籍



し、当時3年生の中国にルーツのある生徒Rさんの学習を支援していました。Rさんについては、当時の校長や担任の先生等がRさんの将来を真剣に考えてくれた結果、HANDSへつながりました。

宇大からその中学校まではバスで1時間以上かかり、バスの本数も少ない交通の環境の中、毎週ボランティアを続けてくれたSさんの熱意とRさん自身の努力等により、Rさんは県立高校への進学を果たすことができました。Rさんの中学校の先生方が、私とSさんをRさんの卒業式に招待してくれ、門出をお祝いすることができました。

高校入学後も頑張ったRさんは、他県の県立大学進学を果たしたとメールで教えてくれました。コンピュータを学びたいと、進路を実現していく姿に嬉しくなりました。

そうして、Rさんからある日また連絡がありました。大学生のRさんは、帰省のタイミングに合わせて、「多言語による高校進学ガイダンス」に中国語の通訳として協力したいと。なんと嬉しいことでしょう。

HANDSが支援した外国にルーツのある生徒が、HANDSの学ボラ派遣事業で学習支援を受け、時がたち、HANDSの事業に協力してくれた流れに、非常に感動したことを強く覚えています。

外国人児童生徒に関する想い

HANDSに関わってくれた皆様と一緒に支援に携わった者として、想いを述べます。

新型コロナウイルスによって、私たちの生きる社会で起きている諸問題が顕在化されました。なかなか声を上げられなかった外国にルーツのある子どもたちも含めて、私たちは以前に比べると、少しは自由に意見を言える世の中になりました。最近では、ある考えを発信しただけで、SNS上で追跡・個人が特定され、攻撃の標的になっています。そのような世の中だからこそ、学生の皆さんが宇都宮大学でHANDSの活動や授業「グローバル化と外国人児童生徒教育」等で学んだことを、日本のあちこちで種をまいて、出た芽を大事に、その地域で育てていってくれたら、嬉しく思います。

そして、「外国人児童生徒」という言葉や「HANDS」の活動がやがて必要ではない社会がやってくるといいなあと思います。どの国にルーツがあろうと、どんな文化的、言語的背景があろうと、決してそれらがかれらにとってマイナスではなくプラスに作用する学校生活や社会生活が送れるよう、外国にルーツのある子どもたちの頑張りだけに頼らずに、同じ時代に同じ地域に生きる者として、私も含めて、ひとりひとりが意識を高めていくことが必要と考えます。

矢部 昭仁さん インタビュー

2020年5月28日

国際学部を卒業して多文化公共圏センターへ

矢部昭仁(やべあきひと)と言います。2004年に社会人入学という制度を使いまして、国際学部に入りました。学部で4年間勉強させていただいたんですが、3年の時に田巻ゼミに入りまして、田巻先生と関わりを持ち始めて、今に至るということです。田巻ゼミに入ったきっかけというのは、僕としては子どもたちの何か役に立つ仕事をしたいなという想いから始まっているんです。国際学部だし、海外の子どもたちとか貧困とか、そういうところに何か出来ないかという気持ちで元々入ったんですけど、田巻先生が宇都宮大学の重点研究として、外国人の子どもたちの教育問題を研究していたんです。田巻ゼミで学んでいるうちに、日本国内でも大変な子どもたちがいるということが段々わかってきました。

学部の卒業論文では公立夜間中学について書きました。外国人児童生徒に関する様々な資料をあたっていくうちに、東京で外国人生徒が集まって勉強している夜間中学というものがあるらしいということを知りました。本当にそんな中学校あるんだと思って、実際にいま8校、9校くらいあると思うんですけども、全部見学に行かせていただきました。その時にこんな中学校があるんなら何でもっと全国的に広がらないのかということに関心を持って、論文を書いたのです。

学部生では唯一、重点研究に直接関わる機会を与えられました。大学院博士課程の坂本文子さんや、修士課程の遠藤歩さん、大谷桂子さんと一緒に。『栃木県における外国人児童生徒教育の明日を考える』では、「外国人生徒の高校進学」というタイトルの論考を書きました。

2007年に卒業しましたが、社会人入学したときに仕事を辞めていましたし、新卒の学生みたいな就職活動は出来ませんでした。田巻先生からも「卒業後どうするの?」と聞かれて、何も決めてないと言ったんですが、実は卒業の半年くらい前から東京の夜間中学の校長先生に手紙を書いて、就職活動をしていたんです。4年の大学の時に教員免許のコースにも入っていたので、免許は取得する予定だったんですね。なので中学校の教員免許は取れるので、体当たりで行くしかないと思って手紙を書いたんです。すべての夜間中学校に教員でも事務でも、非常勤でも良いから、働かせてほしいと言ったんですが、残念ながら、全部アウトでした(笑)。それでその道の可能性は消えて、どうしようかな、重点研究のお手伝いしながら別の仕事も考えていたところで、田巻先生から、1-2年の短期間しか働いてもらうことが出来ないかもしれないけれどという条件で、多文化公共圏センターの仕事を紹介されたわけです。丁度、国際学部が多文化公共圏センターを立ち上げる時期でした。田巻先生がセンター長を務めた最初の2年間(2008年度と2009年度)、センター職員・研究員としてセンターの仕事に関わりました。

センターでの仕事

センターの職員になる時の条件として、ホームページを作って欲しいと言われたんです。学生の時にある程度パソコンやってましたけど、全然得意な分野ではなかったんです。ただ、センターの職員として採用することを多分教授会で審議されたと思うんですが、そういうスキルがないと推薦がむずかしいという話だったと思います。それで、センターに務める前に3か月くらいパソコン教室通いました。それでそういうソフトと格闘しながらセンターからの発信をできるようにしました。1年目の仕事でしたね。今考えると、全く素人が作ったものなので、誰か綺麗にしてくれないかなって思いながら

時々見てますけど(笑)。

センター2年目の仕事として思い出深いのは、「宇都宮市民意識調査」を実施してまとめたことです。宇都宮市市民生活部国際交流プラザと協力して、市内1,121人の外国人住民からの回答結果をまとめました。『多文化公共圏センター年報第2号』の巻末頁を見ると、調査に関わったメンバーとして、張京花(大学院)、和栗佳代(学部4年)、田巻綾那(学部3年)、手塚知里(宇都宮市市民生活部国際交流プラザ)と、懐かしい名前が載っています。

センターの職員をしながら、引き続き重点研究に関わらせていただきました。一番大きな仕事は、外国人児童生徒が在籍する栃木県内すべての公立小中学校の教員を対象とする質問紙調査を計画・実施したことです。28教育委員会をすべて訪問し、調査への理解と協力をお願いしたこともあり、回収率はとても高く、950人の教員から回答が寄せられました。調査結果は、田巻・遠藤・大谷・矢部の4人でまとめました。

ところで、開設当初、センターはここ(B棟3階)ではなくて、国際学部棟1階の学部長室の隣の倉庫みたいなところを借りしていました。そこでは、学部長室で開催されている会議での発言がよく聞こえてしまうという大きな問題?(笑)があり、最終的にここに引っ越しをしたのです。

HANDS初年度のコーディネーターとしてーガイダンスと単語帳

そして、HANDSが始まった2010年度はコーディネーターとしてHANDSに関わりました。HANDSでの仕事は1年間だけでしたが、多言語による高校進学ガイダンスの開催と『中学教科単語帳ー日本語⇄タイ語』の刊行が思い出深いです。

当時、日本人生徒だと90%くらいの生徒が日本の高校に進学するのに、外国人生徒の場合は、実際3割くらいしか進学していないのではないかという指摘もありました。高校に行けないと仕事の幅がぐっと狭くなってしまいます。高校進学を難しくさせる背景に家族の問題があって、高校や受験に関する情報が届いていない、親と子どもたちのコミュニケーションが上手くいってない等、色々な問題があると思われました。それで、まず情報を共有することが一番大事だと思いましたが、実は東京や神奈川では多言語でのガイダンスが開催されているらしいと知り、すぐに見学に行ったわけです。

東京でガイダンスをやっている団体というか有志の方たちに連絡を取って、栃木県でもガイダンスをやりたいと思っていることを伝えると、ものすごい大歓迎だったんですね。やっと栃木県でもそういう人が出て来たのかみたいな感じで、是非見ていって下さいと歓迎されました。見学させていただいた後の打ち上げにも参加させていただいたのですが、皆さん、今の社会的不公平を何とか是正できないかということで物凄く熱い議論をしているわけです。小学校の先生から高校・大学の先生、教育とは全く関係ない仕事に就いている人たちもいて、凄く楽しかったんですね、栃木県でも絶対にこれはやるべきだと思いました。

それで、会議の時に、撮ったビデオを見せて、プレゼンをして、東京のガイダンスのことを伝えました。田巻先生も凄く興味関心を持って喜んでくださって、栃木でも上手く開催出来ないかということで議論が始まりました。

東京や神奈川等の他の地域のガイダンスは、教育委員会とか公的な機関の協力を得て開催しているわけです。栃木県で初めて開催するにあたり、教育委員会等の実質的な協力をすぐに得ることはなかなか難しく、連携という形は整わない中でのスタートとなりました。

田巻先生はあまり壁を作らない人で、全県的なガイダンスが無い現状で、行政から幅広く理解・協力を得ることがすぐに実現できそうにないなら、まず、大学が主催して始めよう、そして、関係者を巻き込んでいこう、協働を呼び掛けていこうというスタンスで開催に踏み切ったわけです。多言語による高校進学ガイダンスは、日本語の他に、英語、タイ語、タガログ語、スペイン語、ポルトガル語、中国語の6言語の資料を用意し、開催されました。

単語帳

もう退職されたと思いますが、泉田スジンダ先生という、多くの学生と一緒にあって精力的に活動をされているタイ人の先生がいらっしゃいました。授業の一環として日本の絵本をタイ語に翻訳して、それを1年に1回タイに持って行って農村の子どもたちに渡して、学生との交流を図る活動もされていました。そして、タイ人の子どもへの学習支援も行っていました。タイの子どもたちの勉強を支えるために、宇都宮大学でタイ語を学んだ学生やOBが中心となって「デスク教室」を開いていました。栃木県では外国人児童生徒の少数在籍校が少なくなく、少数在籍校では特別な支援がないことも珍

しくないようです。日光市の田舎の小学校(少数在籍校)に入学した日本語が全く分からないタイ人の児童も、学校では特別な指導は受けられず、デスク教室に通っていた記憶があります。

そして、この教室に関わっていた学生たちから、日常会話は不自由なく使いこなせる子どもたちも、教科書に出てくる学習用語の理解が難しく困っているのが、学習用語のタイ日対照表のようなものが必要だという声があがり、準備を始めていたんです。確かに、教科書には円周率とか、普通の会話では使わない言葉がいっぱい出てきますね。「デスク教室」を立ち上げたのが大畑美優紀さんで、単語帳の作業を中心に担っていたのが松山舞子さんで、そうした作業が進められていることを知ったのは、重点研究の最後の年度だったと思います。ただ、実際に単語帳のような形で刊行するためには、まとまったお金が必要になるわけで、そこで単語帳の刊行をHANDSプロジェクトに組み込めないかと、田巻先生や泉田スジダ先生に相談しました。松山さんら関係する数名の学生が田巻ゼミに所属していたので、田巻先生もその情報を知っていて関心を持っていました。そこで、相談を重ねて協力して進めることにしたのです。

『中学教科単語帳 日本語⇄タイ語』が刊行されたのは2010年11月30日で、自分はコーディネーターとして、レイアウト等、半年間集中的に単語帳の作成作業に関わりましたが、これは正直大変な作業でした。でも何よりも、単語帳は学生たちの数年にわたる地道な作業の産物ですね。「日タイを言葉で結ぶ会—ラックパーサタイ」のメンバーなど実に多くの方の協力も得て完成したものです。

単語帳はその後、スペイン語、ポルトガル語、フィリピン語、中国語、ベトナム語が刊行されたわけですが、多くの方に利用されていること、今でも問い合わせが来ていることを聞くととても嬉しいです。なかには小学生や高校生向けのものはないのかとの問い合わせもあるようですが、そういうニーズは確かにあるでしょうね。

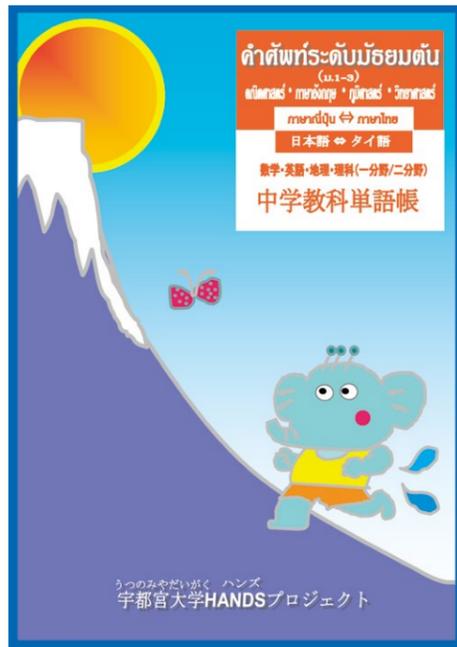
多文化公共圏センターもHANDSも立ち上げの時新しいものが始まっていく渦中にいられたので、忙しかったけど、新鮮というか、本当に楽しかったです。

HANDSの今後

HANDSから離れて随分時間が経ちましたが、HANDSのことはずっと気にしてきましたし、イベントには時々参加してきました。HANDS立ち上げ当時のメンバーや色々な事情を思い出すと、正直、継続していくことは難しいだろうなと思うところはあったのですが、10年間継続させてきたこと、ガイダンスとかも引き継いでくださっていることは凄いと思いますし、物凄く感謝もしています。ただ、ニュースレターなどを読ませていただいているのですが、根本的な問題がなかなかまだ解決されていないと思いますし、教育支援の進み方が遅いとは感じます。

僕はHANDSを大学の1つの目玉であると思っています。地域貢献という意味でも、人材育成という意味でも果たしてきた役割はとても大きいと思います。これから増々外国の方が来るという前提で言えば、もっともっと継続してやってほしいと思います。1つの壁を破るには、個人名を出してしましますが、この3月にペルールーツの小波津ホセさんが国際学研究所博士課程を無事に修了して学位を取りましたが、元外国人生徒のああいう人をもっともっと国際学部・国際学研究所は育て、世に出してほしい。宇大の教員にもああいう外国ルーツの方がどんどん入ってきて、上からというか中からというか、大学を変えていかないと、長い目で見れば、上手くいかなくなってしまいう気はしますね。これまで、良い出会いがあり、ある意味、良い環境も確保できた。でも、当事者たちが活躍できるシステムを作ることが本当に大事だと思うし、そうすれば、かれらのネットワークももっと活用できるようになると思います。

また、HANDSは元々文部科学省の特別経費プロジェクトとして、3年間という期間限定の事業として始まったわけですが、それが二期続き、その後センターに事業に受け継がれたわけですね。学校や地域での教育支援がずっと続くように、HANDSも恒久的な事業として続いてほしいと強く願います。一緒にずっとやっていきますよ、というメッセージを発してほしい。



子どもと関わる仕事

HANDSの後、県内の児童養護施設に就職し、現在も職員として働いていて、ちょうど10年になるところです。児童養護施設自体に最初から興味があったわけでは全然なくてですね。まあ本当に、縁とか成り行きとということになるのかもしれませんが。それで、センターやHANDSで何年間か子どもに関わる仕事を一緒にさせていただいて、折角ここまで色々やらせていただいたのに、全く違う仕事に就くのはどうかなという気持ちはありました。

ネットなどで、何か自分に出来ることないかなということで探したところ、今の職場のホームページを見て、その園長の言葉に凄く感銘を受けまして、仕事させてもらえないかと直接お願いして、仕事を果た次第です。児童福祉に関する知識もなく、関わったのも初めてでしたので、施設ではやや「異質な存在」だったのかもしれませんが、振り返れば10年同じ職場で働いてきたことになりそうです。

仕事は変わりましたが、色々な子どもたちに接したいという気持ちは共通していて、その想いで仕事を続けて来たという感じです。

教育問題に関しては、夜間中学がもっと増えてほしい強く思います。そして、側面から協力できれば何かしたいなと思っています。去年あたりから宇都宮市のPTA連合会が夜間中学の設置を求めている活動をしていることが新聞にも出ていて、田巻先生も少し関わっているようですが、もっと進んで欲しいと思います。夜間中学は別に外国人生徒のためだけのものではなくて、不登校の子たちとか学校行けなかった日本人が学ぶところで、そういう意味では多文化共生の拠点にも成り得るのではないかと考えています。

最後に、重点研究もそうでしたが、HANDSは実に数多くの学生たちの支えがあって続いてきたのだと思います。日本人学生も外国人学生も、すごく意欲的だった学生を何人も思い出します。次から次へと、HANDSに参加し活動する学生が出てきたということは、いろいろな意味でHANDSが学生たちにとって刺激的な学びの場になってきたともいえるのではないかと考えています。

高橋 隆さん インタビュー

2020年5月27日

ペルーからの来日経緯と現在の仕事に就くまで、仕事内容

なんで日本に来たのかというと、出稼ぎのつもりだったんです。31年前はペルーの治安が悪くて、ペルーのテログループがあり、毎日殺人や爆弾テロが起きていたんです。外にも自由に歩けず、どこにでもテロがあることを感じました。経済的にもハイパーインフレで、1分間に何回も商品の値段が変わったりしていました。私は、松下電機に勤めていて、電化製品のテレビや冷蔵庫の値段が日々変化するので、売るのがすごく難しかったです。だんだん給料も少なくなって、子どもも4歳・5歳で、長女が小学校に行っていました。生計を立てることが困難でした。つまり、ペルーの治安の悪さと出稼ぎのために日本に来たんです。最初は家族と一緒にではなく一人でも来ました。南米から出稼ぎに来たのは89年の初め頃だったんですけど、81年頃にペルーの日系人20何人かが第一グループで来ました。そのなかの親戚のいとこたちが沖縄で働いていて、治安良く給料もよいらから日本に来いと言われてたんです。それで、まず沖縄に行ってコンタクト取って、その後川崎や東京の工場に行ったんです。仕事を勧められたんです。それが始まりだったんです。

88年にバブル時代で、ものをたくさん消費者が求めたけど、生産が追い付かなかったんです。でもまだそのときは入国管理局が簡単にビザ申請降ろさなかったから、働く人は不足していたんです。でも、日系人がたくさんいたから紹介してくださいとペルーの旅行会社にしました。その旅行会社は日本に派遣会社があって、それが真岡市にあったんです。

ペルーから成田に行って、直接真岡に行ったんですけど、私はどこに行くのか知らされてなかったんです。30人くらいいたから、派遣会社の人が真岡にあるアパートに適当に振り分けられ、その日は、食事も自分たちで何とかしました。大きな派遣会社が真岡にあったので、そこから仕事を紹介してもらったんです。

89年にバブル崩壊があって、2008年にアメリカのリーマンショック、2011年には東日本大震災があって、従業員がたくさん首になってしまいました。私はそのとき通訳をしていたんですけど、従業員がいなくなったのと同時に私も仕事がなくなり、一か月半くらいの失業保険をもらった。そのとき、私は通訳ができるから、市役所でボランティアとして通訳をしてほしいと言われてました。当時、外国人の失業者のためのイベントを開催していたので、手伝ってくれないと言われて、打ち合わせに参加して、翻訳もやったんです。そのとき、真岡で、中国とアメリカに姉妹都市があって、市役所の課長が、これから国際交流協会をつくりたいんだけど、高橋さんは言葉ができるから一緒に働いてくれないと言われて、働くことにな

りました。今の仕事は通訳、翻訳、イベント(日本人と外国人が参加して交流するイベント)の紹介、例えば日本の文化(作道・茶道・日本料理など)、市役所の中では相談窓口の通訳や翻訳作業をしています。

AMAUTAを始めた動機と準備状況

言葉の問題が最初からあるんですね。派遣会社と入国管理局で、ペルー人の顔は日本人だから、言葉ができると思われていたんです。でも本当は全くできなくて、雇い側と我々はすごく苦労しました。それから10年くらい経って、市役所の相談窓口勤めるようになって、どういう風に日本語を教えようかと思いました。そこで“わたの花”と“SAKU-ら”という2つの団体を通じて、日本語を教えることを始めたんです。

AMAUTAができたきっかけは30年前、最初の日系人が来て、日本は治安が良くて仕事もあってお金をたくさんもらっていました。それで家族(奥さんと子どもたち)を呼ぶことにしました。子どもたちは日本語学校に入って、でも言葉ができなくて、どうしようかとなったんです。派遣会社に日本人で長い間ブラジルに住んでいて、日本に戻った人が何人かいました。その人たちは、日本語もポルトガル語もできたので、学校に派遣しようとなったんです。2・3人くらいが派遣会社に勤めていて、学校教育課に派遣したんです。そこから日本の学校の中で、一つの特別な教室があったんです。今もあります。子どもたちは小～高まで行って日本語を覚えたんですけど、母国語を忘れていってしまいました。家でも話さなくなりまして。女性の友達とその話をしている、「高橋さん、何とかしてくださいよ」と言われて、そのときはどうしようもできないと思っていました。毎日が週3.4回先生も教えるのは大変だと思って、2年間断ったんです。だけど、市役所の国際交流協会にこういうアイディアがあると提案したところ、「作れば」となって作るようになりました。週に一回のスペイン語とポルトガル語が別々の団体で教えましようとなって、そのスペイン語のトップが私で、ポルトガル語の方は別の方がトップになりました。それでAMAUTAが誕生しました。

なんで母語を忘れないことが大事になってくるかというと、一つの言葉を使うのは簡単だけど、別の言葉を覚えたら、生活が広がるからだと思う。今のペルーとブラジルの子どもたちは英語も習っていて、日本語、英語と、もう一言語になり、仕事の幅も広がるし、英語は今ではどこでも通用する言語になっているしね。職業の面でもだいぶ広がる。あとその国民のアイデンティティも必要ですよ。日本人の顔してるけどペルー人、日本人の顔してるけどブラジル人、つまり、その生まれたところの外人になるんですよ。だから日本に来る前はそう思っていました。私はペルーに生まれたけど日本人です。しかし、仕事を通じて始めて日本に来た時に、ペルーから来たペルー人ですよと紹介され、ショックを受けました。言葉は大事です。

AMAUTA開くときの準備は特になし。ただ心だけ。6～7人くらいのお母さんで一人だけは先生だったけど、あとは出稼ぎに来ていた人でした。資料は各自でダウンロードして、こういう授業をやりたいという話しはたくさんしてきました。あとは場所をちゃんと確保して、心があればいい。プロじゃないから。子どもたちが集まって、その前まで日本の学校に行ったら日本人の友達がいたけど、AMAUTAに来てみると、みんながスペイン語やポルトガル語を話していて、親もその言語で話しているから、子どもたち自身も変だなと感じていたみたいです。最初は新しいお友達だから遠慮もあるけど、時間がたつとにぎやかになっていきました。その中に障がい者もいて、最初はそのクラスに溶け込んでいなかったんです。でも、3～4回同じクラスに来て、友達や先生と話すようになってだんだん心を開くようになってきたんですよ。今まで参加していますね。一番大事なことは先生たちと教えたいという気持ちですね。

AMAUTAの歩みとHANDS

振り返ってみて、やってよかった。先生たちの存在はとても大きかったです。最初は1～2年くらいを続けようと思っていたけど、気づけば今年で8年になりました。コロナがなければAMAUTAを開いたり、AMAUTAの誕生会も開催する予定でした。

HANDSができて1年くらいしたとき、宇大にペルーの先生がいるという話を聞いたんです。それがスエヨシ・アナ先生でした。どういう風に会って話ができるかなと思ってたときに、国際交流協会にいたため、いろんな情報が入り、さくら市でスエヨシ先生がペルーの話をするイベントをやることを知って、私も参加しようと決めました。参加して、話をしてみて名刺交換をしたんです。どういう風にHANDSの話になったかははっきり覚えていない。そのとき、AMAUTAはまだなく、AMAUTAのアイディアがあるという話を宇大にしに行ったんです。そこで元HANDSのコーディネーターの船山さ

んと出会い、HANDSを知りました。生徒を学校に派遣していることもそのときに知って、AMAUTAの夏休みの宿題の手伝いをしてほしいかという話をしたんです。それで真岡の教育委員会と話をして、教育委員会が宇大にお願いをして、HANDSがAMAUTAの活動をするようになりました。

直接指導を見てはいないんだけど、子どもたちや保護者の方からはとってもよい評判ですよ。最初のAMAUTAには若林先生も来ていて、3～4年間来ていた。宇大の生徒たちとペルーの生徒たちが仲良くなって、こどもたちが授業中に遊びたいという気持ちがでてきてしまったと感じたんです。そこで、若林先生に子どもたちに勉強の仕方を教えてくれるようお願いしたんです。最初、若林先生は無理ですよと言っていたんですが、引き受けてくれて、座り方から教えてくれて、すぐくためになって素晴らしかったです。

一番大事なことは、言葉ができなくても、まだ若いからちゃんと勉強すれば、日本の子どもたちと同じようになれる。今は言葉が遅れていても、勉強すればだんだんレベルアップもできる。AMAUTAに来ているこどもたちは別の言葉ができるから、プラスで日本語ができれば、日本人の子どもたちと同じじゃなくて、もっと高いレベルになれるんです。勉強のやり方は、横に辞書を置いて、言葉を探して意味が分かったら、解決できる。それから子どもたちも変わったんです。今まではわからなかった問題が、宇大生が丁寧に教えてくれたから、問題を解くことができるようになったと、保護者も話をしていました。最初のころにAMAUTAに来ていた子どもたちは今や高校生になって、大学に行きたいという気持ちがあるんです。20歳になって、専門学校に行って仕事をしている子どもたちもいる。だから続ければ、大きくなって日本語も習得して、世界的にもよい人材になれるんです。

振り返ってみて、やってよかった。先生たちの存在はとても大きかったです。

ペルー人コミュニティの現状や課題、今後の在住ペルー人に対して思うこと

真岡に住んでいる外国人に対して、日本人の気持ちが変わってきたように思います。真岡は田舎だから外国人があまりいなかったんですけど、外国人と日本人と一緒に働くようになって日本人の中での外国人のイメージも変化したんじゃないかと思います。

面白い話があるんです。一緒に働いていた日本人の同僚に、「ペルーにはテレビがありますか?」と質問されたんです。ペルーがテレビに映るときは遺跡など田舎が映っていたからそういうイメージがあったんです。でもペルーはそうじゃないですよ。

国際交流協会があって、外国の料理や習慣を紹介したからイメージも変わってきたんじゃないかなと思うよ。

日本全体も変わってきた。200万以上の外国人が来て、働くようになって、オープンになったように思うよ。前は入管のビザ認定が厳しかったけど。4～5年前になると、南米の日系人がいなくなって、日本は東南アジアに人材をさがすようになりました。今は、スポーツ界でもテレビ界でも外国人がよく出るようになったのもその一つと思うよ。

ペルー人はもう来れないんじゃないかな。4世か5世もいるんだけど、日本では4世ビザもあるんだけど、ビザ取得が難しい。前の定住者や配偶者と比べたら、4世のビザはとても難しい。理由は言葉。マックス5年では家族も呼べない。だからもう来れないんじゃないかな。ブラジルも同じだと思う。ペルーかブラジルの次世代は日本の学校に行ったら、日本人の考え方がある。だから頑張れば良い生活ができると思うよ。

宇大の学生たちとの協力をこれからもよろしく願いいたします。これからも長い付き合いで協力しましょう。

AMAUTAの保護者及び参加していた子どもの声

A los profesores y alumnos del Proyecto Hands.

Quiero expresarles mi gran admiración y agradecimiento por todo el apoyo que reciben los niños de AMAUTA y en especial para con mis 2 hijos en el desarrollo de sus tareas escolares en vacaciones de verano. Ahora el mayor de mis hijos ya terminó la universidad y está haciendo el doctorado. El segundo también está en la universidad y está haciendo arubaito enseñando en un Juku de Tokio.

Durante estos 7 años de clases de vacaciones de verano (Natsu yasumi Tokubetsu Kyoshitsu) han participado muchos niños extranjeros, no solo de Perú, sino que también niños de Brasil, Bolivia, Bangladesh y China, y vienen de otras ciudades cercanas como Utsunomiya, Yuki, Shimotsuke.

Deseamos de todo corazón, sigan impartiendo esta ayuda en beneficio de los estudios de nuestros niños.

Muchísimas gracias por dedicarnos su valioso tiempo y apoyo!
Kasano Emna (Coordinadora de Amauta taller de español)

(日本語訳)

HANDSプロジェクトに関わる教授と学生の皆様へ

まず、AMAUTAの子どもたちが受けているたくさんの支援を、そして、特に私の2人の子どもの夏休みの課題の取り組みを支援して下さったことに、私から大きな称賛と感謝を伝えたい。現在、長男は大学を卒業し、大学院の博士課程で学んでいます。次男は、大学在学中で、都内の学習塾で講師の立場でアルバイトをしています。

夏休み特別教室が行われてきたこの7年間で、多くの外国の子どもたちの参加がありました。ペルーの子どもだけでなく、ブラジルやボリビア、バングラデシュ、そして中国の子ども、また、宇都宮市や結城市、下野市といった他の市町村から来る子どもたちもいました。

これからも、引き続きAMAUTAの子どもたちの学習のために、ご支援を頂けることを心から願っています。

貴重なお時間とご支援を本当にありがとうございます!

カサノ・エンナ(AMAUTAスペイン語教室コーディネーター)

Hands-Amauta. Ya son 7 años desde que comenzó este proyecto de ayudar a los niños de diferentes edades a realizar sus tareas de verano, dirigido por el profesor Tamaki y las diferentes promociones de los alumnos de la Universidad de Utsunomiya del programa de estudios internacionales .Los padres, niños de Amauta estamos muy agradecidos y deseamos que continúe el apoyo y colaboración de Hands cada año.

Higa Juana

(日本語訳)

田巻教授と宇都宮大学国際学部生が主導の、あらゆる年齢の子どもたちに対する夏休みの宿題の支援を目的としたプロジェクトが始まってから、既に7年が経ちました。保護者と子どもたちは非常に感謝しており、これからもご支援とご協力を頂けることを心から願っています。

ヒガ・ファナ

Project Hands muy buenas noches.

Mi nombre es Mafer.

Durante 7 años vengo asistiendo a las clases de Vacaciones Útiles de Amauta; Gracias al apoyo he podido hacer mis tareas y aprender más el idioma japonés que para mí al principio me parecía algo muy difícil de lograr.

Ahora que estoy en esta etapa de Koukou los estudios son más difíciles y tengo un poco de dificultad en los estudios, por tanto desearía que nos sigan apoyando como hasta ahora.

Sigan con esta labor sin fines de lucro que vienen realizando y ayudando a tantos niños y jóvenes a entender el idioma y poder desarrollarnos en este país para que podamos lograr nuestras metas.

Mucha Gracias. María Fernanda Lavado (16 años)

(日本語訳)

HANDSプロジェクトの皆さん、こんばんは。

私は、マフェです。

私は、7年間このAMAUTAの夏季学習教室に参加しました。おかげさまで、夏休みの宿題に取り組むことができ、そして

日本語も学ぶことができました。なぜなら、はじめの頃は、日本語の習得は私にとって達成し難いことだと思っていたからです。

今、私は高校生という段階で、勉強はさらに難しくなり、勉強に対して少し困難を抱えています。だから、これまでのように支援を継続して頂きたいと願っています。

これまでに、多くの子どもたちや若者が日本語を習得できるように、そしてこの国に適応し各自が目標を達成できるように支援して頂いたこの非営利の活動を、ぜひこれからも続けてください。

ありがとうございます。

マリア・フェルナンダ・ラヴァド(16歳)

PROYECTO HAND

Muy atentamente me dirijo a ustedes para expresarles mi agradecimiento por la labor que desempeñan todos los años en favor de los niños extranjeros de Amauta.

Por razones que muchos han venido desde muy pequeños de Perú, Bolivia, Brasil, o han nacido en Japón, y nosotros los padres no dominamos el idioma japonés, no podemos ayudarles en sus tareas escolares.

En el caso de mi hijos Carlos y Kimiko, hay cursos que todavía no dominan pero con la ayuda que ustedes que les brindan en el desarrollo de sus tareas durante las vacaciones de verano pueden resolverlas con éxito, a mis hijos le es muy provechoso asistir a sus clases ya que logran entender la tarea y poder seguir adelante con sus estudios.

Muchas gracias y espero de todo corazón que esta labor que nos ofrecen continúe por muchos años más.

Atte. Angélica Wakabayashi madre de Carlos y Kimiko Wakabayashi

(日本語訳)

HANDSプロジェクト

AMAUTAにおける外国人の子どもたちのために毎年行って頂いている活動に感謝致します。

多くの子どもたちが幼少期にペルーやボリビア、ブラジルから来日したり、あるいは日本で生まれたりしました。そして、私たち保護者が日本語を熟達していないという理由から、子どもたちの学校の宿題を手伝うことができません。

私の子どものカルロスとキミコの場合は、学習についていけない教科があります。しかし、夏休みに行われる宿題の支援のおかげで、彼女たちは宿題を達成することができています。

子どもたちにとって、その授業に参加することで宿題の内容を理解し、次の学習に取り組むことができるため、非常に有益な機会になっています。

本当にありがとうございます。

これからも、引き続きご支援頂けることを心より願っています。

アンジェリカ・ワカバヤシ(カルロスとキミコ・ワカバヤシの母)

外国人児童生徒への夏休み学習支援報告
～真岡市国際交流協会スペイン語教室[AMAUTA]への支援を終えて～

宇都宮大学国際学部3年 五十嵐 茜

HANDS プロジェクトは、7月の末から6回ほど真岡市にあるスペイン語の母語維持を目的とするスペイン語教室[AMAUTA]に訪問し、そこに通う子ども達への学習支援を行いました。支援の主な内容は、子ども達の夏休みの宿題のお手伝いでした。HANDS ジュニアをはじめ毎回複数の学生で参加し、私は6回中3回参加することができました。

私は3回とも、小学1年生や2年生を中心とする低学年を担当しました。私は、今まで外国人児童生徒だけでなく、子どもに勉強を教えた経験が一度もありませんでしたので、わかりやすく教えられるか心配でした。

私の緊張が伝わってしまったのか、最初は子どもに話しかけてもなかなか反応が返ってこなくて、コミュニケーションを

取るのに苦労しました。しかし、積極的に話しかけるうちにだんだん心を開き、子どもの方から質問してくれるようになりました。

私が訪問した8月にもなると、子どもは宿題がほぼ終わっており、絵日記や虫の観察の感想など、自分で文章を考えて書くことが主な活動になりました。かれらは絵を描くことには積極的でしたが、文章を考えるのは苦手らしく、よく手が止まっていました。それを手伝おうとした私は最初、「何をしたの」などと抽象的に聞いていたのですが、その内に「誰と行ったの」「いつ行ったの」「どこで」など、具体的に尋ねる方が言葉が出やすくなり、文章も考えやすくなることに気がきました。

担当した子どもは日本語で文を書くのは苦手でも、日常的な会話はできる子がほとんどでした。しかし、なかには日本語を聞き取るのが苦手な子もいたようでした。その子は、私が話す日本語を一生懸命聞いてはいたのですが、その内容を全然理解できずにいました。私は、「私の説明の仕方が悪いからこの子が理解できないのだ」と思っていました。しかし後になって、その子は日本語が分かっていたことを知りました。その子が、とても申し訳なさそうに「日本語がわからない」と、私に伝えてきてくれたのでした。私は教えることに必死で、そのことに気づいてあげられませんでした。なぜ私の説明が伝わってなかったのか、もっと考えるべきだったと反省しました。

夏休みの学習支援という貴重な体験を通して、私は子どもに分かりやすく勉強を教える難しさ、母語が違う子ども達とのコミュニケーションの難しさを再認識しました。また、「AMAUTA」を運営するお母さん方は、私たちが学生であるにも関わらず「来てくれて本当にありがとう」ととても感謝してくれたことが印象的でした。子どもの日本での学習について真剣に考えている保護者の気持ちが、ひしひしと伝わってきました。

今回「AMAUTA」学習支援に参加したことで、私は外国人児童生徒の問題をより深く考えたいと改めて思いました。そのために、これからもHANDSの活動に積極的に参加し、学生ができる支援をたくさん実践したいと思います。

●HANDS next vol.18(2014年11月13日)

坂本 文子さん インタビュー

2020年5月26日

自己紹介

宇都宮大学の国際学部国際社会学科を卒業した後、大学院国際学研究科博士課程を出ました。大学院時代には外国人児童生徒教育をテーマに研究し、休学して、ベトナムのストリートチルドレンの自立活動支援をするNGOで日本語教師兼現地スタッフとして働いたり、在籍しながら宇都宮市の市政研究センターという自治体シンクタンクで研究員を4年ほど勤めていました。その後、現在の宇都宮大学地域デザインセンターで働き始めて今年で5年目です。地域と大学の間に入り、共同研究やプロジェクトなどの事業へとつなげるコーディネーターとして働くと同時に、教員として社会調査法も教えています。専門は多文化共生論です。

HANDSとの出会い

HANDSになる前の出会いだと思います。HANDSになる前からHANDSになった後しばらく関わっていました。国際学部の当時の藤田和子学部長先生がお辞めになる時に、これからは日本にいる外国人児童生徒教育をもっと取り上げるべきじゃないかというテーマを残していかれて、そのご担当が田巻先生でした。私はベトナムから帰国したばかりだったので、自分で希望してというよりも、田巻先生の研究室に所属していたことや、元々、子どもとか貧困とか外国人とか労働者とか、田巻先生が得意とされる分野に興味・関心も強かったので、修士論文のテーマとして外国人児童生徒教育について研究を始めました。



大学の重点推進研究として数年、実態調査などをやっていくなかで、ニュースレターを発行することになり、その際にHANDSという名前を関係者で決めたことを覚えています。

こども国際サマースクール

宇都宮市の生涯学習課から4日間の1日だけを田巻研究室でやってくれないかという話をいただいたと思います。その後2、3年関わらせてもらいました。私が担当したその最初の1回目の時に、冒頭からすべて外国語で進行するゲームをやってみました。日本にいる外国人の方の気持ちを体験してもらおうと、子どもたちが何を言われているのか分からない状況をつくりたくてやりました。いわゆる「外国人」という存在を連れて行き、その国の文化の話をしてもらうやり方があると思うのですが、日本に住み続けている外国の人たちもいるにもかかわらず、お客さん扱いされている講師の方の存在にとっても違和感があったからです。

その後、せっかく4日間のプログラムなのであれば、連続性を持たせてたほうがいいんじゃないかと学生ながらに生意気にもその当時の東市民活動センターの所長さんに伝えました。、ゲームの様子も見ていただいていたせいか、面白がって真面目に聞いてくれまして、次年度から4日間全部お願いしますとまた依頼が来ました。その頃、HANDSの前身となる一歩が動き始めていたのだと思います。

次の年あたりから、ブラジリアンスクールの子たちとの交流をメインにした内容にしたのですが、私が1番気をつけていたのは、「教える側」と「教えられる側」に分けないことでした。日本人が教える側で、ブラジリアンスクールの子たちが教えられる側にはならないようなプログラム構成を先生たちと一緒に考えていきました。カマキリのジェスチャーがブラジルと日本では大きく異なることに着目したゲームをつくるなど、わざと違いを浮き立たせて、それを面白いと思ってもらえるような工夫をしました。外国の子どもたちが自国の文化に自信をなくしていること、日本の学校に来た途端に日本語が出来ないだけで劣った存在として扱われていることなど、様々な問題があることを知っていたからです。

印象に残っているのはプログラムが終わった後に日本人の子どもが私のところに寄ってきて、「こういう違いを見つけた!」「ブラジリアンスクールの子たちとこんな違いがあるなんて面白いね!」ってわざわざ私に言いに来てくれた子がいたことです。自分が目指した方向性が子どもたちに伝わったのだなという嬉しさもあったし、なぜそういう経験を公立の小学校や中学校の中ではできないのだろうか、新たな課題も感じました。

外国人児童生徒教育問題についての意見

外国籍の子たちが日本で教育を受けることが義務化されるべきだとは一概に言えないと思っているのですが、外国籍の子どもたちを含めて義務教育の問題が議論されていないこと自体が、非常に大きな問題だと思います。

2001年には国連からも、外国籍の子どもが義務教育の対象外であることに対し「教育を受ける権利」が保障されていないと、是正を求められたほどの問題です。これほど重い問題であるにも関わらず、この問題は、私が外国人児童生徒教育を中心に研究していた10年、15年くらい前と比べても本質的には変わっていないと思います。つまり、オールドカマーと呼ばれた韓国・朝鮮人それから中国帰国者たちに向けた恩恵的な国の態度は、根本的に変わってない。もちろん、今では文科省も公立小中学校へ外国籍児童生徒を積極的に受け入れなさいというような指示を出したりですとか、母語指導を行うといった支援制度が拡充されたりですとか、同時翻訳のアプリなど技術も進歩しているし、サービスも改善されています。しかし、根本的なところで国の姿勢が変わってないことが問題だと思っています。

教育支援についての意見

義務化されるべきだとは一概に言えないと先ほど言ったのですが、何故そこに至るかということ、母語や母国の文化については、日本生まれの外国籍の子たちが増えている中で難しい問題だと思うからです。

例えば、日本の学校に行くこともできるけれども、両親がブラジル出身でブラジルの文化を大事にした教育を子どもに受けさせたいと思った時に、公立の学校では非常に難しい。するとブラジリアンスクールに通わせるわけですが、その教育水準は住んだ地域によって大きく左右され、民間の塾のような場合もあるわけです。そもそもブラジリアンスクールが近くにあるかどうか分かりません。つまり、仕事の都合などで、偶然住んだ地域によって、その子どもが受ける教育水準は異なる。場合によっては、高校に行けるかどうか左右することになります。外国人が集住する地域では手厚いサポート

を受けられ、そうではない地域に住んだ子どもは、サポートが保障されません。その格差をどう埋めていくのかという視点、ひいては「教育を受ける権利」を日本がどのように守ろうとしているのか、という視点から教育支援を見直さないと、外国人児童生徒の教育支援の問題は解決しないと思います。教育支援といったときに、教室の中で母語ができる相談員さんが来て教科学習の支援が受けられるとか、大学生がサポートに来てくれて進学モデルを得られることはもちろん大事なことです。保障について議論していくことが重要だと思います。

夜間中学校という選択は学習の機会を保障するという意味ではあったほうがいいだろうなと思います。でも、日中の学校ではなくて夜間中学校に行かなければならないその背景には、働かざるを得ない家庭環境であったり、もしかしたら公立中学校でのいじめの問題だったり、もしくは、日本の義務教育は年齢制限が非常に厳しいので来日年齢によって通わせてもらえなかったり、非常に多くの問題が隠れていると思います。今では日本人でもいろんな問題を抱えている人がいますから、受け皿といった意味では夜間中学校があった方が、外国籍の子どものためだけではなく良いだろうなと思います。

もう1つ、これだけ人口が減ってきて、外国人が急激に増えている中では、夜間中学校をどうやって維持していくのかも大きな問題です。これについては、外国人児童生徒教育の問題に関わる人たちが、具体的な解決策の部分も一緒に整理して行かない限り、なかなか進まないだろうなと思います。義務化や教育を受ける権利といった根本的な議論は、国レベルでなされないといけない時期に入っていて、もう遅すぎるくらいだと私は思っています。

この他、学生や市民の多文化共生に向けた関心と活動を広げるために現在、宇都宮市コミュニティFMのミヤラジで「あなたの隣の外国人」という番組を放送したり、「TABOWATA(多文化防災に興味あるんです、私)」という5分間の防災番組を多言語で作って3か月間毎日放送したりしているのですが、とにかく「外国人」というキーワードが出てきそうにない分野の人たちを巻き込むようにしています。本来、外国人であっても、住民とか市民という視点で扱えていれば、生活に必要なものは必要だし、必要じゃないものは必要じゃない。でも、多くの人がそういう感覚ではないことに問題を感じています。「外国人」というワードが出た途端に、「私たちの専門じゃありません、関係ありません」という反応をされることもまだ少なくありません。でも、そこで終わってはいは、「外国人」というワードに関心のある国際学部の学生さんのような方しか関わってこないといった状況になるのではないのでしょうか。

後は、楽しくやること。楽しいと思えるところには人が集まるし、外国籍で日本に長く住んでいる外国人住民たちを見ても、言葉の上手下手ではなくて、楽しそうにしている人に、人は集まってくるように思います。皆さんが扱っている問題(外国人児童生徒教育)は、比較的専門性が高いので、皆さんのようにしっかりと勉強した人たちが関心のない人たちを取り込んでいけばいいと思います。そして、関心がない人とは、楽しいとか、面白いと思ってもらった後で、少し専門性の高い話をしてはどうでしょうか。「こんな問題があるから一緒に考えましょう」ではなくて、美味しいものあるよとか、これ可愛いよね、こういう違いって面白いよねとか、そういうポジティブな流れをつくっていくことで、これまで「外国人」と関係ないと思われていた分野の人たちを巻き込めるんじゃないかなと思います。私も活動を続けています。

HANDSへの期待や要望

国内の多文化共生の実現に向けて、小中学校へ派遣するボランティアの制度や外国にルーツをもつ生徒のための入試制度、教科指導のための辞書の製作、高校進学ガイダンスの開催など、これだけ外国人児童生徒教育をめぐる「内なる国際化」に貢献してきた学部とか大学は他にないと思うので、これからの日本社会・地域社会を創っていく人材育成にとって大切な機関になっていると思います。

今後は、さらに「地域コミュニティ」との連携を考える時期にきてるのではないのでしょうか。2018年1月に宇大がホストとなり、高校進学ガイダンス主催者交流会が開催されましたよね。他県では、もっとNPOなどの団体が高校進学ガイダンスを担っていて、こんなに大学が中心になってやっているところはないと思うんです。大学が中心になってやってきた良さは残しながら、もっと市民を巻き込んでいかないと、「この問題について勉強した人たちだけが分かっている」みたいな世界になってしまうので、大学ではなく地域でもこの問題を担える人たちが出てくるといいなと思います。

HANDSはこれまで地域とは十分連携してきたと思います。ただ、おそらくHANDSで関わってきた「地域」というのは、教育委員会であったり、校長先生であったり、拠点校の先生だったり、そういう「地域」だったと思います。今、私が述べた「地域コミュニティ」というのは、学校関係者、教育関係者だけじゃなくて、地域住民とかママ友とかとの関係をつくっていくこと、互助的な住民同士のコミュニティの形成に対して大学が貢献できることもあるのではないかと、ということです。

HANDSが、「地域」から、「地域コミュニティ」へと一歩踏み出していくことを期待しています。

加藤 佳代さん インタビュー

2020年5月19日

現在の仕事

加藤佳代です。神奈川県立地球市民かながわプラザ、あーすびらざ外国人教育相談窓口でコーディネーターをしています。年間1600件くらい相談があり、曜日によってフィリピンのタガログ語、ブラジルのポルトガル語、中国語、南米のスペイン語で対応しています。

『HANDS next』はいつも読んでいて、スタッフ間でも回覧しています。HANDSプロジェクトは目が離せないプロジェクトです。

HANDSとの最初の接点

当館で外国人教育相談窓口が始まった翌年(2007年)、栃木県の小学校の先生が訪ねていらっしゃいました。はるばる来てくださった理由を尋ねると「栃木県も外国人児童が増えている。あーすびらざに相談窓口と教材があるとホームページで知ったので、休みを利用して来てみた」とのことでした。その先生がその後、若林秀樹先生を紹介してくれました。当時はまだ中学校の国際教室で教えていらっしゃいました。

2010年、若林さんから、「いま宇都宮大学のプロジェクトに関わっている。外国人児童生徒担当の先生向けQ&A集を作ることになった。参考になるような他県のQ&A集はあるか」と質問がありました。その時は愛知県豊橋市教育委員会発行の手引き、神奈川県教育委員会や東京都高等学校教職員組合作成のQ&A集などをお見せしました。

すると翌年(2011年)、『教員必携 外国につながる子どもの教育 Q&A・翻訳資料』が届きました。読んでみると、これまで見たQ&A集とまるで違っていて驚きました。そこには、中学校の先生をしていた若林さんの思いや経験、先生達へ伝えたいメッセージがたくさん盛り込まれていました。

従来のQ&A集との違いは、例えば「Q.学級担任としてどのように接すればよいでしょうか」(p.8)に対して、「担任は子どもにとって一番身近な存在。子どもが誉めて欲しいとき、理解して欲しいときを感じとり、自信を持って接してください。(中略)子どもが担任に望んでいるのは外国語の能力などではなく、身近な理解者になってもらうことだということを忘れないでください」と書いてあります。若林さんが伝えようとしているのは、ノウハウではなく、教師としての向き合い方なんです。「Q.日本語が分からないのに、授業には参加させたほうがよいのでしょうか」(p.20)については「この授業は無理だから別室で日本語を、と安易に判断するのではなく、将来を考えたときに今どんな支援がもっとも効果的かを見極める(中略)支援者の目標は日本語の習得ではなく、学力を付けること」と真っ当なことを述べています。このようなQ&A集は初めてで感銘を受けました。

記述の仕方も4月から始めて、一年間何がおこるか、月を追って書いてあります。初めて外国人児童生徒を受け持ち自信を失いがちな新米の先生の力になるQ&A集です。「これは使える」と思い、神奈川県や横浜市の教育委員会へ紹介しました。

2011年秋、若林さんから、「宇都宮大学が開催するフォーラムで、神奈川県で『教員必携』を使っている事例を紹介してほしい」と言われ、12月にHANDS主催の「外国につながる子どもフォーラム2011」にパネリストとして呼ばれました、そこで初めてHANDSと接点ができました。

HANDSに対する思いや期待

まず、心から感謝しています。最初は小学校の先生がきっかけで若林さんと知り合い、その紹介で田巻先生と出会いました。田巻さんから受けた影響は非常に大きく、HANDSで出会えたことにとっても感謝しています。

初めてお会いした時、田巻さんはまだあーすびらざを知らず、来たことがありませんでした。ライブラリー機能を持つスペースの中に相談窓口があると言ったら、「珍しい。一度行ってみたい」とおっしゃって、翌年(2012年)12月、本当に学生さんを連れて来てくれました。これを皮切りに、その後、何回も来て来ています。2014年は、大学院生だったホセさんやお嬢さんを連れて見学に来てくれました。この時は、うちの外国人スタッフも紹介しました。2016年12月、学生さんがベトナム人にインタビューしたいということで、一緒に来られました。その後も本を出されると、当館のライブラリーに寄

贈してくださっています。2019年2月、ゼミ生を大勢連れて、フィールドワークに来てくれました。こうした繋がりを通して教わることがとても多いです。その行動力、実践力のすごさに圧倒され、勇気づけられています。

HANDSが10年を迎えられたとのことですが、HANDS以前、宇都宮大学重点推進研究としておこなっていた活動が、2010年から文部科学省特別経費プロジェクトになり、その後、2016年度多文化公共圏センター事業になったと伺っています。組織が移り変わる中で10年続けるのは大変だったことでしょう。今後、どのような形になるのかわかりませんが、ぜひ続けていってほしいです。それがHANDSへの期待です。

外国人児童生徒教育支援の現状と今後のあり方について

国内の現状をこの場で語るのは難しいです。神奈川県で15年近く仕事をしてきましたが、県内でも各市や町によって状況が異なります。県の現状について私の印象でよければ、そうですね……。教育を受ける権利でいうと、外国人児童生徒は義務教育対象から外れています。しかしたとえ義務教育対象でなくても、「日本語ができるようになってから入ってください」という小中学校は神奈川県には無いと信じています。他県の話では「義務教育対象ではないから」という扱いを受けるところもあると聞いていますが、神奈川県では、そのような対応は少ない、もしくは無いと思っています。

学校の先生方の能力も質もさまざまですね。意識の高い先生もいれば、経験豊富な方、初めて担当する方、外国籍児童生徒担当を望んでいるわけではない方もいます。神奈川県では、先生方に向けた研修プログラムを各市の教育委員会が工夫していて、その研修にあーすぷらざが関わることも多くなりました。日本で子どもに教育を受けさせた経験がある当館の外国人スタッフ達が出かけて行って、先生方に向けて話をしています。ここ数年、各市の教育委員会から呼ばれるようになりました。「外部から話を聞こう」という姿勢、そうした流れになっていることは、受け入れる力が他県よりあるということだと思っています。当館に声をかけてくださるのは非常にありがたいです。

神奈川県は日本語指導の必要な外国人児童生徒数が、愛知県に次いで全国2番目で、この順位は10年以上変わりません。日本語指導が必要な児童生徒を多く抱えているという意識を、各市町の教育委員会や学校の先生たちがお持ちです。いろいろなQ&A集、訳語集、単語集、教材なども作られています。

しかし、若林さんが中心になって作られたHANDSの『教員必携』ほど、一教員の思いや経験が詰まったものは無いです。こうした必携を出せたのは、すごいと思います。県や市単位で出すと、どうしても思いが薄まってしまいます。県は図体が大きいので、ストレートに伝えるものを出しにくいところがあります。だからこそ、この『教員必携』は貴重です。

実は、これを見た神奈川県教育委員会から「これをつくった人に話をしてほしい」と言われ、ご紹介したところ、2012年に県教育委員会主催外国人児童生徒担当者むけ研修会で、若林さんが講演してくださいました。

教育支援の今後のあり方ですが、現在、当相談窓口は、年間1600件ほどの相談を受けています。しかし母数を考えると、相談が必要な人にまだまだ使われていないのではないかと、との思いがあります。ぜひ、保護者や学校の先生だけでなく、もっといろいろな人にうまく相談窓口を使ってほしいと思いますし、そのための工夫が課題だと思っています。

感謝

HANDSが中学教科単語帳を出されてますよね。2010年度にタイ語版、2011年度スペイン語版、2012年度ポルトガル語版、2013年度フィリピン語版、2014年度中国語版、2016年度ベトナム語版と、出ると同時に、当館に寄贈していただいています。ありがとうございます。これは非常に人気がありまして、書架に並べるとすぐ借りられていきます。それで、HANDSさんに貸出用と閲覧用がほしいとお願いして多めに送ってもらっています。中学に入ってなかなか勉強についていけないという中学生、その保護者、先生方から相談を受けた時、単語帳を紹介すると、喜んで借りていきます。このような単語帳を作ってくくださったことに感謝しています。

田巻先生が2019年に出された『ある外国人の日本での20年-外国人児童生徒から「不法滞在者」へ』、そこに出てくる青年Tさんが、田巻先生に手紙を出したきっかけは、領事館が差し入れたこの単語帳で、奥付に田巻さんの名前があったから田巻さん宛に手紙を書いたとのこと。その話を伺ってものすごく感動しました。単語帳があったから、青年は田巻先生と繋がることができたのですよね……。

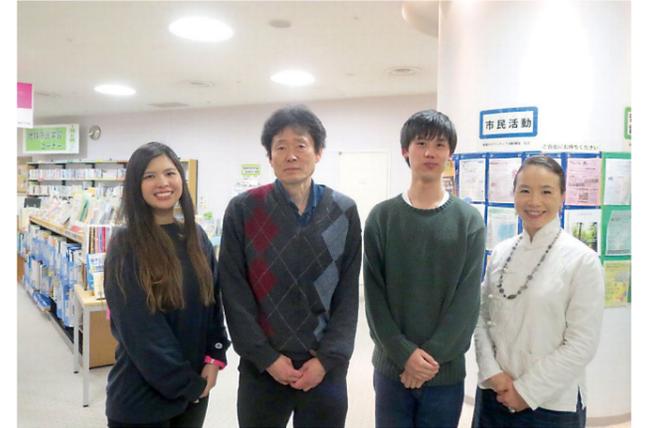
単語帳が作られた当時は、それがどのような広がりを持つか、わからなかったと思います。HANDSプロジェクトのひとつとして、このような単語帳をつくってくださったことにお礼を申し上げます。

最近の神奈川の外国人教育相談の特徴

15年前とここ数年の相談内容はかわってきています。以前は突然、子どもを連れてきてしまってどうしよう、という親からの相談が多かったです。その後、自分の国の人同士で情報が回っているのか「いきなり連れてきて困りました」という相談が減っているように思います。あと、定住化も進んできているので、「高校進学をどうしよう」だけでなく、大学・大学院進学への相談も増えてきているように思います。

教育相談窓口には、学習している本人、保護者、支援者、先生、教育委員会、行政職員などから相談が寄せられます。以前と比較すると、保護者や先生からの相談が増えている気がします。

直近では、コロナ禍の影響で「大学に入ったけど4月から休校で不安だ」、「オンライン授業の受講方法がわからない」、「日本語教室が閉まっていて7月のJLPTをどう勉強したらいいか」、「普段開いていた近所の相談窓口が閉まっていて困った」、「家に小学生がずっといて仕事に行けなくてお金がなくなっちゃった」、「自営業がうまくいかない。支援金について知りたい」といった質問が来るようになりました。経済状況の悪化で、教育に関する相談よりも、お金や仕事に関する相談が増えてきていると感じます。



学生と共に、度々あーすぷらざを訪れてくれる田巻先生
(於:あーすぷらざ 2階 情報フォーラム)

HANDSという「資源」について考える

帝京大学宇都宮キャンパス総合基礎科目講師 石川 朝子

宇都宮大学HANDSプロジェクトとの出会い

2015年12月5日、私は宇都宮大学 HANDSプロジェクト主催の「外国につながる子どもフォーラム 2015」に初めて参加しました。その時は、現在この原稿を執筆する機会をいただくことになるなど全く考えてもいませんでした。あの頃は宇都宮に引っ越してきたばかりで右も左も分からない状態でしたが、勇気を出してフォーラムに参加して良かったと思っています。また現在外国人生徒の学びの場に関する研究調査をご一緒させていただく機会を頂いたのもご縁だと、嬉しく思っています。

私が大阪から宇都宮に仕事の移動でやってきたのは、5年前のことです。それまでは主に大阪の地で、教育社会学の観点から、人権教育や外国人生徒教育・キャリアについての研究をしてきました。関東での取り組みについては、学会などで会う知人を通じて話聞いた程度の知識しか持ち合わせていませんでした。ましてや、北関東における外国人教育や支援の現状についての情報は非常に限定的でした。

実際宇都宮に身を置いて仕事を始めるにあたって、自分の研究テーマの一つである外国につながる子どもの教育についての情報を必死に探していたことを覚えています。そこで見つけたのが、先ほどの宇都宮大学でのフォーラムのお知らせでした。当日は、受付で学生が暖かく迎えてくれたことを覚えています。その頃のHANDS Jr.のコーディネートをされていた方へフォーラム後に送ったメールを見つけました。次のような感想を書いています。

「昨日は、フォーラムに参加させていただきありがとうございました。フォーラムの内容もさることながら、HANDS Jr.のみなさまのキラキラとした活躍ぶりはただただ羨ましい限りです。やはり、高い意識をもって活動している学生さんがいらっやることは、素晴らしいパワーだと感じました。」

初めて参加したフォーラムでは、多くの学生が聴講に来ていただけでなく、小中学校の教員の方や教育委員会、研究者、地域の方など多くの方々が集まって、活発な質疑応答がなされていたのに驚きました。外国人生徒の教育について、多くの方が非常に高い関心を持たれていることを知り、自分の居場所を見つけることができたように感じたことを覚えています。

全国の外国人生徒の教育支援について

全国の外国人生徒への教育支援については、研究及び実践レベルにおいて、これまでも多くの問題提起がなされてき